

不思議な話

—奈良と若狭の小浜は水で繋がっているのか—

浜田 道雄

二月の声を聴くと大和の古寺では修二会が始まる。長谷寺の「タダ押し」、法隆寺西円堂の「鬼追い式」、そして二月に入るとすぐ東大寺二月堂の「お水取り」だ。大和に春の近づくのも遠くないと報せる行事である。

二月堂の修二会が「お水取り」と呼ばれるのは、その十二日目に二月堂下の關伽井（あかい）から香水を汲み、本尊の十一面観音に供する儀式があるからだ。

この井戸の水は若狭の小浜から若狭彦神社の祭神である遠敷明神（おにゅうみょうじん）が送って来るものだという。それで三月二日に小浜の遠敷川にある「鵜の瀬」で若狭神宮寺の僧によって「お水送り」という神事が行われる。二日に行うのは、小浜から奈良まで水が届くのに十日かかるからだそう。

これと似た話が「西鶴諸国ばなし」巻二の「水筋の抜け道」にある。

一七世紀も半ばのこと、若狭の小浜の漁網問屋で働く下女がそこで網糸を仕入れ行商する都の若者と親しくなり、将来を誓いあった。しかし、それを知った問屋の女房は「店の風紀を乱す」と怒り、下女の頬に焼け火箸をあてて折檻した。

顔に醜い火傷を負った下女は世を憐んで小浜の海に身を投げた。しかし死体はどこに流されたものか、見つからなかった。

そのころ、大和の秋志野の里（今日では「秋篠」の字が当てられていて、西大寺の北にある村）で村人たちが用水池を作るため穴を掘っていた。しかしいくら掘っても水が出てこない。

それでもなお頑張つて掘っていると、突然大きな穴が開いて水が渦を巻いて流れ出し、瞬く間に池を満たした。

一夜明けて村人が池に行つてみると、死後十日ほどたった見知らぬ娘の死体が岸边に浮かんでいる。村のものでも、近在のものでもない。不思議なことがあるものだとか村人が騒いでいると、そこを通りかかった行商人が死体を見て「若狭で言い交わした娘に似ている」という。すぐに小浜に問い合わせると、たしかにその娘は十日ほど前に小浜の海に身を投げて死んだといつてきた。

好きあつた娘の死を嘆き悲しんだ男は遺体を懇ろに秋志野の里に葬ると、僧となつて娘の塚の側でその後生を弔つたという。

この話では小浜の海で死んだ娘の亡骸が秋志野の池に浮かんだと伝えているのだから、二つの地の間に水の流れがあると人々は信じていたことになる。これは二月堂の關伽井と同根の話だ。だが奈良と小浜の間には多くの山や谷がある。その地下を水が通じていることなどありえない。にもかかわらず、平城宮を東西から挟む二つの地、東大寺二月堂と西大寺北の秋志野の村が、同じような話を伝えている。

若狭の小浜とこの奈良の二つの地の間には、今日の私たちには知りえない何か水に因む縁があつたのだろうか。また、東大寺と西大寺という平城京の二大寺に連なるところに同じような話があるということには何かの意味があるのだろうか。

なんとも不思議な話である。